

「信心の行者」

澤 智昭

一

失礼いたします。初めに三帰依文を唱和させていだきたいと思います。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

欲聞座聞法会、第四講目でございます。この時間を担当させていただきます、名古屋市熱田区西福寺の住職をしております澤と申します。まず初めに拝読をさせていただきますと思います。昨日、宮田さんが『大経』のことをお話しされて、ちよつと感化されました。『大経』の文を最初に、気持ちを着ける為に拝読をさせていただきますと思います。

仮令い身を諸の苦毒の中に止るとも、

我が行、精進にして、忍びて終に悔いじ。」

仏、阿難に告げたまわく、「法蔵比丘、此の頌を説き已りて、仏に白して言さく、「唯然り、世尊。我、無上正覚の心を發せり。願わくは仏、我が為に広く経法を宣べたまえ。我当に修行して仏国を摂取し、清浄に無量の妙土を莊嚴すべし。我、世に於いて速やかに正覚を成らしめて、諸の生死・勤苦の本を抜かしめん

ありがとうございます。こういう講台に立たせていただきますと、非常に緊張感がみなぎってくるんですけれども、今日は特に、なんでおられるんかなあという方、久しぶりにお会いした方もいらっしゃるものですから、ますます緊張しておるようなことです。

昨年までの名古屋 雲集の会、冬の聞法会で、私が記憶しておるところでは二回ほど藤原猶真代表から話をせよという、そういう話を受けたんでありますけれども、問題を抱えていらっしやらない方は誰一人いらっしやらないわけですけれども、私自身、具体的に言いますと愚痴話になってしまうのでボヤツと言いますと、家庭の問題と言いますか、寺に難を抱えておるということが数年来ございまして、とてもお引き受けする自信がなかったというのが正直なところであります。トランプで言うたら「パス2」「ぐらいまでさせてもらってですね、もう「パス3」はできないだろうという気持ちと、それから、このままではですね、前に進めないなということがございまして。昨日、宮田さんが取り上げてくださいましたですけれども、

たとい大千世界に

みたらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは

ながく不退にかなうなり

（『真宗聖典』第二版574頁）

と。やつぱりみたらん火の中で聞いていかんならん。また、話をさせていたただかんならん。そういうこう、自分を奮い立たせながらですね、ここに立つて臨んでおるようなことでございます。

それで、まず初めにですね、申し上げるきっかけとか、自分の中でこのことはしっかり受け止めたいなあということで、お礼の気持ちも兼ねて、出あわさせていただいたお一人の方のことを、まず紹介させていただきたいというふうに思います。

今日も来てくださっておりますけれども、私の預かっております西福寺の門徒総代をつとめてくださっているお一人で、野村利夫さんですね。野村さんとうこうして住職と総代という関係で同じ聞法の会座に座らせてもらって、聴聞させていただけるといふのは本当に幸せなことだなあということをつくづく思うんですけれども、野村さんとの出会いから色んな体験をさせてもらいまして、そして色んな方とも出あわさせていただきました。その中のお一人に

野村さんの従兄弟さんである高木豊さんという方がおられました。高木さんとお会いさせていただいたのは、野村さんのご尊父様の命日にお参りに行かせていただいた時にお会いさせてもらったわけです。

一言でいって熱心な聞法者でいらつしやいました。特に曹洞禅のほうにお詳しくて、『正法眼蔵』の参考書なんかもいただいたんですけれども、私はとても読破できませんでしたが、それ以外にもいろいろな聞法の会座でお話をされたことをお話ししてくださったり、あるいは、講演録をコピーしてくださったり、非常に熱心な方がまだいらつしやるんだなあと、ということで、色んなお話を何回かそのご命日のお参りの時にさせていただいたことがございました。野村さんと同じく非常に温厚な方でいらつしやいましたですけれども、ほんとにこう、求道者の情熱というんでしょうか、そういうものを秘めていらつしやる方で、非常に思慮深い方のお一人でいらつしやいます。その高木さんがですね、実は亡くなられました、ここ数年ちよつと体調を崩されておられたというだけで全くお会いすることはかなわなかったんですけれども、それだけにそういう話を聞かせていただきまして、残念だなあとという思いがございました。

た。

その高木さんのことを想います時に、いつもおつしやってたなあとというキーワードが一つあつたんですね。それがですね、「この先生の話はちよつとこなれてませんでしたね」とか、「とてもこなれてましたね」というお話を何回かおつしやっていたんですね。あまり「こなれる」というのは日常的に使わない言葉だと思いましたが非常に印象に残りました。で、改めて辞書を引いてみますと「熟れる」と。

熟語の熟という字を書いて「こなれる」と読むというところが、今更ながらに調べて分かりました。この一字でもってですね、この熟れるということの意味合いがなにか領けてくるわけです。

聞法における大切なキーワードとして響くか響かんかということがあるかと思うんですけれども、その前提というか、その前には言葉というか話というか、その流れの中に、この熟れているかどうかという、そういうことが一つあるのかなということをおもうんですね。分かる分からんとか、分かりやすい難しいとか、色んな形で、お話を聞くとそういうことにとらわれてしまうわけですが、やっぱり自分もこうして話をさせてもらっているから余計に思

うんですけれども、話をさせていただく以上、どこまで自分の言葉が熟れているのかなということが、これは自問自答していかなきゃいけないのかなというのを、高木さんがこういう言葉をよく使われることによつて、なにか思い知らされてきたということとが一つあるわけであります。

仏教語といいますと分かりやすさということが今日求められるということがありますけれども、こういう言葉であれ、そこに、仮に難しいと思われてもです、熟れているものがあれば響いてくるということでしょう、それは曾我先生のお話を聞いていかれたたくさんの方々が領いていかれたというところから、なにか領けることでございます。

そういう意味で、高木さんから熟れているかどうかということをお聞きしました時に、自分がこれからお話をしていく上で、もし高木さんも聞いてくださっていたならば、「澤さん熟れてましたね」と、こう言うていただけるような話をしていきたいなと、そういうふうに進進していききたいなと、そんなことを思っている次第であります。

だからといって熟れているかどうかというのはほんとに自信がない話でございまして、ちよつと法務

があつて今日は途中から参加させてもらっているんですけども、もう堂々たるご講義を中山先生がしていらつしやつたものですから、もう自分は場違いだなあということを、いま感じながらここに立つておるような次第であります。

二

そういうことですね、今回この時間が与えられましたので自分としては、復活していくというか、前に進んでいきたいなということで、そういう心持ちから出来上がってきた非常につたない話を聞いていただければということを思います。

それで、こんな話になっていくきっかけになりましたのが、これは私自身が非常に色んな偶然を意味付けして、それに乗つかつてやつていきたいという、そういうタチがあるものですから、ちよつと無理やりな話なんですけれども。その高木さんが昨年亡くなられたのは聖徳太子の祥月命日といわれております二月二十二日というふうに野村さんから聞いております。で、その昨年の二月二十二日は何があつたかといいますと、三日間にわたつて冬の聞法会が開

かれておりました。その二月二十二日にお話をしてくださったご講師の一人が、伊勢の酒井正夫先生でいらっしやいました。当日は私、司会をやらせてもらいましたので覚えているんですけども、先生は「無題」という形でお話をされたんですが、そのお話の内容から、確か先生の了解をいただいて「生活者の思想」という講題をつけて講義録の出版はされています。

酒井先生はお話の中で何をおっしゃったかと言いますと、曾我量深先生のことを読むと生活者の薫りがすると。そのようにいわれ、また、宗正元先生が魂という言葉を使われる時は思想性を表すんだというところをおっしゃっていますね。その言葉が講題として結びついて「生活者の思想」というふうになっただけですけども、特にこの「生活者」という言葉が非常に私は印象に残りました。当日は後席でたまに酒井先生の隣に座らせてもらって、色んな話をさせてもらったということがあったものですから余計にその時のことが印象に残ったんですね。この生活者という言葉は色んな先生が口にされて、色んな場で聞かせていただいていたんですけども、平易な言葉ではありますが、生活、生活者ということ

一体どういう内容を持つて、そういうふうな薫りがあるといわれたんだろうかということが疑問にございました。

それで、生活者ということを、自分なりに聞いてきた方のお言葉から推察というか、尋ねてみたいなというのが話の始まりでございます。生活ということでですね、まず思い返されましたのは、今でも続いておりますけれども雲集聞法会という、私が事務を担当させていただいておることもあつてテープ起こしをしてるんですけども、その中で貝沼先生がかつて何度か太宰治の言葉を紹介してくださったということがございました。改めてその言葉をちよつと調べてみましたら、ご存じの方もいらっしゃるかと思うんですけども、『人間失格』の冒頭にある言葉でございました。「恥の多い生涯を送つて来ました」という一文に続きまして、

自分には、人間の生活というものが、見当つかないのです

と。そういう一文なんです。何度かお話してくださったので非常に印象に残ったんですけども、最初教えていただいた時は太宰治がそういうふうにいるんだとは思わなかったんです。でも、

よくよく改まって考えてみますと、生活といっても基本的には衣食住ということになるんでしようけれども、現在、能登半島地震の悲惨な状況をみますと確かに生活を成り立たせる基盤として衣食住というのが当然あるわけです。しかし、衣食住が今、私なら私に整っているといってもですね、それだけで満足できないものがあるわけです。そういう中で、生活の見当がつかないというのはどういうことになるのかということが一つあるんですね。ですから生活、生活という事で色んな言葉を費やしたとしても、なにか「見当つかないのです」という言葉に寄せて考えてみますと、全て跳ね返されていくような、なにかそんな響きを持ったのがこの「自分には、人間の生活というものが、見当つかないのです」という、そういう言葉だと思うんですね。

もう一人、これも私すごいなあと思つて心に残っているんですけども、これはもう三年半ぐらい前になりますでしょうか、名古屋 雲集の会で宗正元先生の百箇日法要というものを興西寺様で勤めさせていただきました。その時に、貝沼さんの興西寺の本堂が焼けてしまつたということがありまして大半の蔵書が焼かれてし

まったということ、宗先生からたくさん蔵書を寄贈していただいたということをお話しされて、そこに宗先生のノートもあつたということで、そのノートを回し読みをさせてもらったということがあるんですね。パラパラとめくらせてもらつて、宗先生のノートというのを初めて拝見させていただいたんですけれども、ノートによつては趣が違ふんでしようけれども、私が見たノートは自分と同じような要点筆記というんでしょうか、そんな形で書かれていて非常に親近感を持ったということがありました。それと同時にですね、そのノートの端つこの方に書かれていた言葉が非常に、私にとっては衝撃的だったんですね。何が書かれてあつたかと言いますと、

我々の人生は何が問題なのか、それがわからない

というふうに書いてありました。なにかこう、ありそうな問いではあるんですけども、なかなかこういう表現をとるということはないんじゃないかなあということ、ハツという感じでですね、心に残つたということがございました。これ、昭和五十三（一九七八）年の大地の会のノートというふうに記されておりましてので、お歳を換算させていただきます

と宗先生が五十一歳ぐらいの時のノートということ
で、今の私と変わらないぐらいの年齢で「我々の人
生は何が問題なのか、それがわからない」という、
そういう素朴な問いを抱えながら、しかし、私から
すると宗先生は本当に自由自在にお話をされた先生
でありましたですけれども、ずっとこういう問いを
秘めながら思索していかれ、苦悩していかれ、それ
で色んなお話を私たちにしてくださったんじゃない
かなと、そんなことが感じられてくる問いでござい
ました。

ですから、非常に簡単な一文で、どうこうとい
うのもおかしいんですけれども、太宰の言葉、それか
ら宗先生のお言葉ということを思い浮かべますと、
人間の生活あるいは我々の人生というけれども、そ
の言葉自体ですね、もう問いなのではないかと。い
ろいろこう、説明とか言葉を費やしたとしても全て
跳ね返され、結局その言葉から発せられてくる問い
が生活、あるいは人生と。そういったところで表現
されているのかなと。つまり問いかけてくる言葉、
それが生活と。そんなことをこのお二人の方の一文
から思わせられることであります。

三

そしてですね、もう一人、お聖教とは関係がない
話なのかもしれませんが、この言葉に出あつ
て私はどこかこう、なんていうんでしょかね、生
きていくことに積極性というか、そういうものに目
覚ましてくださったお言葉として紹介をさせていた
だきたいんですね。これはもう皆さんもご存じでい
らっしゃると思いますけれども、『夜と霧』の作者
であるヴィクトール・フランクルの言葉であります。
冒頭、

心理学者、強制収容所を体験する

という、この一文から始まる『夜と霧』という著作
であります。これは第二次世界大戦下でのナチスの
戦争犯罪を告発するために書かれたものではなくて、
心理学者として悲惨な収容所生活の体験を記した、
そこに崇高さというものがあるんですけれども、そ
こで語られているお言葉が非常に私にとっては有難
かったということがあるわけであります。

その言葉が出される背景なんですけれども、収容
所生活の中で仲間のみんなが一体何に苦しんでいた
かという、極限の悲惨な強制収容所生活というの

が一体いつ終わるんだという、その期限がわからな
いということに苦しんだといっているんですね。だ
から、そこから出てくる言葉というのは、もう生き
ていることに何にも期待を持たない。仲間が口々
にそういうことをいつてきたと。そうした言葉にど
うやって応えたらいいのかということで、このフラ
ンクルはこういう言葉を出されるわけです。ちよつ
と長いんですけども引用させていただきたいと思
います、

ここで必要なのは、生きる意味についての問い
を百八十度方向転換することだ。わたしたちが
生きることからなにを期待するかではなく、む
しろひたすら、生きることがわたしたちからな
にを期待しているかが問題なのだ、ということ
を学び、絶望している人間に伝えねばならない。
哲学用語を使えば、コペルニクスの転回が必要
なのであり、もういいかげん、生きることの意
味を問うことをやめ、わたしたち自身が問いの
前に立っていることを思い知るべきなのだ。生
きることは日々、そして時々刻々、問いかけて
くる。わたしたちはその問いに答えを迫られて
いる。考えこんだり言辞を弄することによって

ではなく、ひとえに行動によって、適切な態度
によって、正しい答えは出される。生きるとは
つまり、生きることの問いに正しく答える義務、
生きることが各人に課す課題を果たす義務、
時々刻々の要請を充たす義務を引き受けること
にほかならない

という、こういう言葉なんです。つまり、生きる
ことは日々、そして時々刻々問いかけてくるんだと。
その問いかけてくる問いに私たちは答えを迫られて
いるんだと。そういう存在なんだということですね。
ですから、よくいわれることではございますけれど
も、私が生きる意味を問うのではなくて、すでにし
て生きることから私は問われているということであ
ります。そしてその問いに答えなくてはならない。
日々、時々刻々、問いかけてくるその問いに日々、
時々刻々、自分の業として応えていくと。ですから、
生きることから問われているその問いに答えていく
ことが生きる意味なんだと。そういうふうにフラン
クルはいっているんだと思うんですね。私が問う
んじやなくて問われているんだと。こうやって私が
いま話しているこの場でも私は問われているのだと
その問われていることに対して今こうして話してい

ることが私の答えなんだと。その時々刻々の問答の往復、それが一つ生活というふうにおさえられてくるのかなど。

先程の太宰の言葉、それから宗先生の言葉からしますと、生活そのものが問いであるとするならば、だから、その生活から私たちは問われているんだって、自分が生活を問うわけじゃないんだと。それが生きることなんだというふうに言ったらいいでしょうか。

ですから言葉を換えて言えば、一人ひとりに与えられた現実から問われていることに応答していくことが生活であると。その時々刻々の不断の問答、それが私の人生であり皆さんの人生なのではないかと。そういう問答の中から、太宰はこのようにおっしゃり、また、宗先生もこのようにおっしゃっていました。で、宗先生はきつと、先ほど申し上げた「我々の人生は何が問題なのか、それがわからない」というその問いを念じつつ、不断の問答ということを続けていかれたのではないかと。そういう意味で、亡くなられて色んな方からお話を聞いて、かえって宗先生のことが身近に感じられてくるというんでしょうか、そういうこともあって、生活者といった時に

私の知っているその先生方の中で、この度いろいろ問うていく中で感じさせられたのが、この宗先生の言葉であつたわけであります。

四

その生き様と言うか、生き方と言うか、翻ってまたそのことを聖教の中に尋ねていきたいなあというふうに思っていますね。それで、いま私が一番身近に感じているのが蓮如上人であります。蓮如上人といえば『御文』でございますけれども、『御文』の基本構造というのは信心正因・称名報恩ということに尽きるんだろうと思うんですけれども、たくさん『御文』はそういう構造でもって書かれているわけです。そういう『御文』の中にあって、今日実は早朝に葬儀がございました、「白骨の御文」を還骨で読ませていただきましたですけども、「白骨の御文」であったり、あるいは私が非常に心に響いているのは「睡眠の御文」なんですけれども、色んな異彩を放つ『御文』というのはたくさんあると思うんですね。

その中で一つ、この度注目させられていたのはで

すね、三帖目の第四通、「大聖世尊の御文」といわれている御文さまでございます。ちよつとそこを見ていただければというふうに思います。この『御文』の背景ですけれども、「文明六年八月十八日」の日付がございます。で、この『御文』が書かれたのはご存じのように吉崎時代でございますして、蓮如上人が六十歳であります。前年の文明五年には『正信偈』『和讃』が開版されるということがございました。

その一方ですね、この文明六年になって三月二十八日に吉崎の坊舎は炎上しているということがございます。さらには文明の一向一揆といわれております、富樫幸千代と争いがあつて、そこでも戦火があつたということがあるんですね。そして、翌文明七年八月二十一日には蓮如上人はこの吉崎を退去されて河内出口に出られているという。そういう背景がある中で書かれたのがこの「大聖世尊の御文」なんであります。冒頭のところだけちよつと尋ねてみたいなと思います、

夫れ、倩つら人間のあだなる体を案ずるに、生あるものはかならず死に帰し、さかんなるものはついにおとろうるならなり。さればただいたずらにあかし、いたずらにくらして、年月を

おくるばかりなり。これまことになげきてもなお、かなしむべし。このゆえに、上は大聖世尊よりはじめて、下は悪逆の提婆にいたるまで、のがれがたきは無常なり

（『真宗聖典』第二版 963 頁）

というふうにございます。さびれていたといわれる本願寺を、これ、一帖目の第七通のところが非常に印象深いんですけども、

加賀・越中・能登・越後・信濃・出羽・奥州七か国より、かの門下中、この当山へ、道俗男女参詣をいたし群集せしむるよし、そのきこえかくれなし。これ末代の不思議なり。ただごともおぼえはんべらず

（『真宗聖典』第二版 928 頁）

と蓮如上人が驚くほど賑わつていかれたのがこの吉崎であります。ところが、この「大聖世尊の御文」が書かれる直前にはもう坊舎も炎上してしまっているわけですね。つまりあの賑わいにも転機が訪れたということがあつたんですね、「さかんなるものはいよいよおとろうるならなり」と。実感して書かれたのが最初の一文じゃないかなあとということが窺えるわけであります。

そして、「さればただいたずらにあかし、いたずらにくらして、年月をおくるばかりなり。これまことになげきても、なおかなしむべし」とございます。

この一文を私はいつも、今日もあげてきたんですけども、葬儀の表白の中に読み込んで読ませていただきます。私が作った表白は『御文』さまからとる文章が多いんですけども、色んな文章がある中で、このように「さればただいたずらにあかし、いたずらにくらして、年月をおくるばかりなり。これまことになげきても、なおかなしむべし。今にして如来のみにあいたてまつらずば、いずれの時においてか出離の縁にあいまつらんや」という形で表白をあげさせていただくんですけども、やっぱりこの一文というのが何回読んでも自分の身にしてみてくるということがございます。

どれだけ充実したというか、そういう生活、素晴らしい生活を送ったとしてもですね、やっぱりただいたずらにあかし、いたずらにくらして、年月をおくるばかりなりという、この感慨というものはやっぱりこう、浮き彫りになってくるというか、動かしがたいというか、免れ難いというか。真宗再興の上人といわれた蓮如上人がですね、この言葉をあげら

れているというのはやっぱり非常に重い響きを持った、誰もが感ぜざるを得ない一文じゃないかなというのを改めて思います。

そして、

このゆえに、上は大聖世尊よりはじめて、下は悪逆の提婆にいたるまで、のがれがたきは無常なり。しかれば、まれにも、うけがたきは人身、あいがたきは仏法なり

（『真宗聖典』第二版 963 頁）

というふうにございます。ここで「大聖世尊」「悪逆の提婆」と言葉をあげていらつしやいますけれども、この二人にあらゆる衆生を包んで、「のがれがたきは無常なり」というふうにおさえられ、「しかれば、まれにも、うけがたきは人身、あいがたきは仏法なり」というふうにいわれます。三帰依文冒頭の言葉が浮かんでまいりますけれども、こうして人の身を受けて、そして仏法を聞かせていただきますと、このお言葉というのはそれこそ理性では到達できない、ただ人の身を受けたからこそ、さらには仏法を聞かせていただいたからこそ出てくるお言葉でございまして、その難さということがですね、やっぱり理性を越えてくるということなんですけれども。

やつぱり出遇い得たからこそただかれてくる聖言がこの一文でないかなあというふうにただかれます。受け難い人身を受けたからこそ、遇い難き仏法にも遇えるわけでありまして、その値遇の喜びがここには込められているのではないかなあというふうにただかれるわけがあります。

たまたま仏法にあうことをえたりというとも、自力修行の門は、末代なれば、いまのときは出離生死のみちはかないがたきあいだ、弥陀如来の本願にあいたてまつらずは、いたずらごとなり。しかるにいますでに、われら弘願の一念にあうことをえたり

（『真宗聖典』第二版 964頁）

というふうにございます。ここでもう一回「いたずらごと」という言葉が出てきますけれども、ただいたずらにあかし、いたずらにくらして、年月をおくるわれらなんだけれども、弥陀如来の本願にあいたてまつらずは本当にいたずらごとになってしまいますよと。そういうことが一つ窺われます。

そして、ここに「弘願の一念」という言葉がここに出てくるんですけれども、全部あたたつたわけではないので分かりませんが、この「弘願の一念」とい

う言葉もなにか貴重な言葉のような感じがするんですね。「自力修行の門」ということも含めてですね、この「弘願の一念」という一言に帰して、そして「われら弘願の一念にあうことをえたり」と。

その前に「しかるにいますでに」という言葉がございます。三帰依文の「人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く」とございますように、私たちにおきましては、仏法における身の事実というのは、やつぱり「すでにして」ということが大事なんじゃないかなと思うんですね。そのことには、無自覚ではありますけれども、だからこそ、そこから実は真宗の証道というものが始まる。それが「すでにして」という一句じゃないかなというふうには私は思うんですね。で、その真宗の証道というものは次の、

このゆえに、ただねがうべきは極楽浄土、ただたのむべきは弥陀如来、これによりて信心決定して念仏もうすべきなり

（『真宗聖典』第二版 964頁）

とおさえてございます。「ただねがうべきは極楽浄土」、願ですね。「ただたのむべきは弥陀如来」、信ですね。「これによりて信心決定して念仏もうす

べきなり」、行であります。願、信、行の展開としてこの真宗の証道の向かう道行というものをこの一文で見事にまとめていらつしやるというふうに思います。

これが生きていることから問われ、表現していかれた蓮如上人の念仏生活ということの、象徴的な表現がここにあるのではないかなというふうに私は思います。

五

そしてさらにですね、もつと具体的にその生活ということに踏み込んだ表現といたしまして、これは野村さんが大好きな『蓮如上人御一代記聞書』のお言葉を見てみたいというふうに思います。ご存じのように、そこには「如来・聖人の御用」とか「仏物」とか、それから「仏法領」という言葉が出てまいります。全部数え上げられたかどうかは分かりませんが、パッと見た感じでそうした言葉が十四ヶ条ほど、この『聞書』にはあげられています。代表的なものを取り上げてみたいと思うんですけれども、第七十九条ですね。

一 「朝夕、如来・聖人の御用にて候う間、冥加の方をふかく存すべき」よし、折々、前々住上人、仰せられ候う由に候う。

（『真宗聖典』第二版1042頁）

というふうにここにございます。ここでは「如来・聖人の御用」というお言葉が出てまいります。朝から晩までいつも如来・聖人のおはたらきによって日暮らしが成り立ち、養育護念されているんだということであります。その「冥加」という言葉もですね、これは御用という言葉に準ずるような言葉と言つていいかと思うんですけれども、そのおはたらき、お力というものを深く心得ておかねばなりません、お折に触れて蓮如上人がおっしゃったということであります。

もう二つほど見させていたくださいんだけれども、一六二条目ですね、これは蓮如上人のご教化を受けたご門徒さんのお言葉でしょうか。

一 或人、申され候うと云々「われは、井の水をのむも、仏法の御用なれば、水の一口も、如来・上人の御用と存じ候う」由、申され候う云々

（『真宗聖典』第二版1057頁）

とございます。水を飲むことは喉が渴いているから

というぐらいにしか思いせんけれども、実は一口飲むのも「仏法の御用」であり、「如来・上人の御用」なんだと。そこまで、形としてですね、おっしゃっていかれる。本当にこう、身にはたらく事実を受けた言葉、そこに目覚めた言葉というふうに言えるかと思います。それに合わせるような形で、一七〇条ですね、

一 御膳、まいり候うときには、御合掌ありて、
「如来・聖人の御用にて、き、くうよ」と仰せられ候う。

（『真宗聖典』第二版¹⁰⁵⁹頁）

とございます。これが私は蓮如上人の食前の言葉じゃないかなというふうに思うんですね。もちろん着るという言葉はございますけれども、「如来・聖人の御用」にて食べると。ですからですね、この言葉を大切にすれば、真宗大谷派の食前の言葉、食後の言葉もやっぱりこの一言は入れなきゃいけないんじゃないでしょうか。ですから、「み光のもと われ今幸いに 如来・聖人の御用にて この淨き食をうく いただきます」と。食後は「われ今 如来・聖人の御用にて この淨き食を終わりと 心ゆたかに力身に満つ ごちそうさまでした」と。ぜひ私は

この一文を入れてほしいなということを、こんなところでいってもしょうがないですけども（笑）、提案したいような思いであります。

そもそものがたぶん勤行ということに繋がっていくんだと思うんですね。言葉にする口にする、そういうことで身に意識させられる。そういう意味でこの「如来・聖人の御用」とか「仏物」とか「仏法領」ということを蓮如上人が大事に、盛んにいわれていかれたというのは、身体感覚に訴えていく、そういうことが一つあるのかなと思うんですね。

そういう形で蓮如上人は、私が今ずっと話してきたところから申しますと、様々な与えられた現実から問われ、そしてそれに応答する形で親鸞聖人の『教行信証』、また色んなお聖教に尋ねていかれることを通して、これが念仏生活なんだということ明らかにしてくださったのが、いま申し上げてまいりました『御文』であり、そして『聞書』に記されている具体的な行実ということではないかなと、そういうふうに思うわけであります。

問いが大事だということを教わるんですけども、その前にやっぱり生活そのものから、生きることから私たちは問われ、それに応答する形で人生とか生

活という言葉で表現される自分の姿があるんだという事です。

それこそ、熟れてないなあと思うんですけども、やっぱりその「生活者」という一語がですね、いただきたいなあということで尋ねてきたんですけども、蓮如上人の表現をもう一回引用しますならば、いたずらごとに終わらせない弘願の一法にあうべしと。そのように生きることからの問いに応答していかれた蓮如上人のその表現に、生活者の姿というものを私は見たいわけがあります。それはそのまま如来・聖人の御用にある生活であり、真宗の証道を歩んでいく行者の相であります。

今回この、この人いったい何を話しているんだろうなと思われているかと思うんですけども、やはり法蔵魂からは程遠いというか、なにか自分の生活そのものが、やはり本当に地に足がついていないというか、悶々としながら過ごしてきたということがありまして、もう一回なにか、自分そのものを問い直してみないと進めないなあということ、この度こんなお話をさせていただいたんですけども。あのー、うーん、そうですね、なかなかこう、表現し尽くせないというか、これをきっかけに欲聞座とし

て出発したこの聞法の会座に乗り遅れないようにというか、うーん、どんな形で関わっていけるか、自分の今の状況では心許ないところもあるんですけども。やっぱり親鸞聖人の和讃であります「みてらん火をもすぎゆきて」という、その中で色んなよき師、よきとものお話を聞かせてもらいながら、自問自答しながら、不断に反復しながら、聞法していくことに、自分の生きるといえることが、やはりあるのかなと。そんなふうに思っているような次第であります。

全く熟れていない話で、高木さんに「熟れてませぬねえ」といわれそうですけれども、この度の自分の考えてきた話は以上であります。藤原猶真座長がこの聞法会の挨拶文で書いてくださったように「衆生の「願樂欲聞」に法蔵魂がうずいているのです」と、つまりこの願樂欲聞というところに身をゆだねながら、自分のこの法蔵魂というものを感じていきたいなというふうに今は思います。私は中山先生のようにスラスラと言葉が出ない人間でありまして、もう一週間分ぐらい話をしたんじゃないかなというぐらい、あんまり人様の前ではしゃべらない男であります。非常に疲れました。もうここで終わらせて

いただきたいというふうに思います。ご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

A

我が身に降りかかってきているその現実というところの生活ですね、それが改めて、そこから問題だというより、それが虚偽なんだというような、そういうような眼差しを開いていただいたというようなことで受け取らせていただきました。

澤

私自身は、何年か前にヴィクトール・フランクルのことについて、新聞でシリーズで書かれた記事がありまして、その時にもう一回『夜と霧』を読みなおしたんですね。その時に、悶々としていたということもあるんですけども、最近になってそれをちょっと読み返しまして、コペルニクスの転回というようにフランクルはおっしゃいますけど、発想の転換というか。でも、よくよく考えてみると、やっぱり聞法生活というものも、我が身が問われるということからすると、フランクルの言葉ですけれども、私

自身はそれによってもう一回、なんか襟をただされたというか、むしろそういうふうにいただければ、もうちよつと力になるというか、力をもって生きていけるような、そんな感じがいたしまして、思い切って引用させてもらったというようなことです。

A

なんかほんとに、解学でなくて、行学なんだという感じさせてもらいました。

B

澤先生のお話を聞いて、私、教誨師をしてるんですけども、この間、教誨師の大会で映画の『あん』という、ドリアン助川さんの原作の映画を皆でみて、それで教誨というものを尋ねていこうという研修があったんです。その中でハンセン病、樹木希林が演っている役で徳江さんというんですけど、その徳江さんが、人間は何の為に生きるのかと、役に立たないのでは人間の生きる価値が無いんじゃないかという問いの中で、人間は、生きるというのは、世の為に生きるのじゃなくて、その世界から自分自身が問われているんだ、その声を聞く為に私たちは生きるんだという言葉を見して、それが映画の中に盛り込まれているんですけど、今日のお話を聞いていま

してですね、フランクルの我々が人生を問うんじゃないくて、人生そのものが私たちを問うているんだということに相通じてですね、なにかこう、深い意味を感じたわけです。それで、ここでもよく「聞法」「聞法」というんですけども、聞法というのは直接には仏法を聞くことなんだと思うんですけど、仏法というのは、言葉の中にあるんじゃないくて、この地球全体、無量寿のいのちの響きを聞いていくことが聞法であって、自分の周りの方々の声を聞いていくということも大事なんじゃないかなと、今日感じました。ありがとうございます。

C

先ほど澤先生からお名前をあげていただきました野村でございます。私、蓮如上人の『御一代記聞書』がとっても大好きでしてねえ。どこが一番好きかというと、

「仏法は、一人居て悦ぶ法なり。一人居てさえ、とうときに、二人よりあわば、いかほどありがたかるべき。仏法をば、ただ、より合い、より合い、談合申せ」の由、仰せられ候うなり

(『真宗聖典』第二版1066頁)

ということがあって、さすがに蓮如上人、すばらし

いことをおっしゃるなあということを思いますと同時に、次の、

「心中を改め候わん」

(同)

心を入れ替えますよという人は、何れも違ふよと。全部悪いことを埋めて改めるというのが、それは違うんだと。

「いろをたて、きわを立てて、申し出でて、改むべき事なり」と云々 「なににせんずる、人のなおらるるをききて、われもなおるべきと思うて、わがとがを申しいださぬは、なおらぬぞ」と仰せられ候うと云々 (同)

要するに自分の過ちというか、悪いところを正直にそのままいい出して、なおしてもらえということをおっしゃっているんだということで、非常に分かりやすい表現で書かれておるところが、私がこの『御一代記聞書』が一番好きなところでありまして、まだ言いたいことはあるんですが、しゃべると切りがなくなりますので、すみません。

澤

ありがとうございます。

D

ありがとうございます。いま生活の中というお

話を聞いている時に、吉野弘さんの「I was born」という詩をずっと頭の中で思い巡らせていました。生まれるということは受身なんだよね、ということ子を子どもが言うんですね。それでお父さんは、蛭蛸という虫はね、といって、お腹のもうほんとにキウキュウなるところまで卵があつて、そして産まれたらすぐ死んじゃうんだよというお話をするんですよ。私たち、生まれるっていうことと、生活をしていくっていうことと、そのいのちの……、なんだろうな……。ごめんなさい、私、実は妹が二〇二〇年の二月の四日に亡くなりまして、それを思うと、妹は何の為に生きたんだろうということを、思う。それで、今おっしゃったドリアン助川先生から私もその言葉をいただきました。人間っていうのはそこにいるだけの、そのためにだけに生きてきた、それだけでいいんだよねっていう言葉をお聞きして、それで、今の「I was born」の生まれるということの受身であるとか、あと生活していくっていうことなんだけど、ここにいま私が存在するということが聞法していくことなんだということをやつと今、気づいて、そしてその聞法していくという、すごく単純なことなんだけれども、それを頭の中でなにか、お

つしやるように、こなれてしまつて、それに気付かない、大事なことの、大事なことが覆いかぶさつてしまったんだなあっていうことを、お話を聞かせていただいて気付いたことです。どうもありがとうございます。

E

失礼します。『御一代記聞書』で「如来・聖人の御用」ということを取り上げられましたけれども、それが具体的にどういったことを表しているのか、つまり「如来・聖人」とは何なのか、ということです。その前のところからの流れで、問いかけ、応答ということがありましたけれども、如来・聖人というところで蓮如さんがおっしゃっているのが問いかけというふうに考えていいところなんですかね。

「如来・聖人の御用」とは具体的に言えば、何なのかということですよ。

澤

具体的にというのと、どうなんでしょうね。如来・聖人といういい方自体がちよつと曖昧と言えば曖昧な表現、まあ「聖人」はもちろん親鸞聖人でしょうけれども、「如来」というのも、普通に言えば阿弥陀さんなんだと思いますけれども。今ちよつとお話

聞かせてもらって、ちょっと言い過ぎかもしれませんが、諸仏というか、生活の中で出あわせていただく人や出来事、色んなことを、一つ象徴的な形でこういうふうな表現をとっていると思うんですけど、あらゆる出来事というのが、この如来・聖人という言葉に収めて、自分を問いの前に押し出すというか。私が今日お話しさせていただいた、問いの中の生活というか、そういうもののベースにこの言葉があるのかなあとというふうに私は受け取ったんですけども、確かにもうちよつと言葉を厳密にいただかなければいけなかったなあと思います。親鸞聖人も如来というところに諸仏ということを見ておられるということもありますし、もうちよつと広く考えてもいいのかなというふうに思います。

E

単純なことかもしれませんが、この「御用」は「おんはたらき」ということですかね。

澤

私はそのように受け止めたんですけど、まあそれよりも、字自体はボヤけてますけど、「冥加」という言葉もすごく大事だなと思うんですね。例えば「はたらき」といったら、直接的に何か感覚するわけじ

やなくて、「おかげさま」という言葉がありますけど、そういうところの何か、そういう力という意味ではこの冥加、なかなか受け取りにくい言葉ですけども、御用ということに通じるというか、現象としては冥加というんですかね、どう言ったらいいんですかね。そういう感じがいたします。

F

御用にしろ、冥加にしろ、先ほどの言葉で言えば、熟れている、とつてもとつても熟れている言葉が『御一代記聞書』なんだろうなど。であるからこそ、生活実感を通して、こういう表現がなされてくる。Eさんのような問いも不要なほど熟れていると言うか、なにかそのままもうただけがいいのかなあと、感じております。

澤

だから、ほんとにいただく、なんですよね。ストレートにというか、ほんとにいただくんですけど、ただだけないから、なんかこねくり回してしまうというか。それが熟れるということじゃなくて、複雑にしていくなということもあるかもしれません。ただ、容易にいただくという言葉を使ってしまうんですけど、自分も、今日お話しさせてもらって、ああいただけ

てないなあという感じがするのは、やっぱり、ほんともうこのまま、直に、ただいだきたい、そして、それを話すということが自分の表現として熟れていけば、伝わっていくものがあるのかなあと 생각합니다。まあ、熟れるということは永遠の課題というか、それが高木さんからいただいた貴重な言葉だなあというふうに思っています。

E

いただくということもそうですし、先ほど来の、役に立つ為に生まれたんではなくて、生まれたこと、そのこと自体に意味があるとかということもそうですけど、そのことが分からないというか、ここまでは言うて怒られそうですけど、言うだけだったらできる、ということが、どうしても課題だなと思いついて、ほじくつていきたいなということがあります。

澤

それも分かります。

(二〇二四年二月二日 名古屋教務所議事堂)